

海・川・湖その世界とのふれあい

# マリンズノー

MARINE SNOW

No. **15**  
1994. 3. 31



## ● 目次

開館10周年にあたって ..... 1	トピックス..... 4 催し物..... 5
イルカの 赤ちゃんが生まれた!..... 2	浅虫の海の生物たち(15)..... 6 浅虫水族館日誌抄録..... 6 動物紳士録..... 7

青森県営浅虫水族館





## 開館10周年にあたって

館長 稲葉 忠

昭和58年7月、常陸宮両殿下をお迎えして開館いたしました県営浅虫水族館は、平成5年7月で満10年を迎えました。

この記念すべき10周年の節目に、館長として水族館の運営に携わることのできましたことは、私にとりまして、このうえない喜びに存じております。

開館翌年には現天皇・皇后両陛下であります当時の皇太子・皇太子妃両殿下のご来館を仰ぎ、また現秋篠宮殿下であられる当時の礼宮殿下のご来館をいただくなど皇室の方々をはじめ、県民、近隣県の皆様、そして観光客など多くの方々のご観覧をいただきました。

幼児から高齢の方々まで年代も様々で、親子等、家族のコミュニケーションはもとより、老若男女、世代を超えたコミュニケーションの場として広く利用されて参りました。

お陰様で、平成5年8月上旬には開館以来、有料入館者が350万人を超えました。このことは、浅虫水族館の所在地であります青森市の総人口が30万人未満であることを考えるとき、この10年間、年間平均35万人の方々にご来館いただきましたことは特筆に値すると言っても過言ではありません。

これもひとえに、県民の皆様をはじめ、近隣県の方々、地元浅虫温泉の方々並びに関係機関の皆

様の水族館に対する深いご理解と暖かいご支援の賜物と心から感謝申し上げますと共に、ご来館の方々にご満足いただけるよう、日夜展示に創意工夫を凝らし、数々のイベントを開催し、入館者促進に努められた県ご当局並びに歴代館長をはじめ、職員に対し、深く敬意を表するものであります。

浅虫水族館では今、10周年の記念事業として「いるか館」を建設中です。この「いるか館」は全国に先駆けて、ショーを引退したイルカの休養を目的とした高齢イルカの放養を行うと共に、来館者にイルカの給餌体験ができる等“イルカとのふれあい”をテーマとして建設しているもので、浅虫水族館に新たな話題と魅力を付加してくれるものと期待しております。

浅虫水族館では、これまでもスルメイカの展示や青森市の鳥に指定されている海鳥「善知鳥」の展示などの全国に先駆けた展示を行って参りましたが、今後共、近年続々誕生する超大型水族館の新しい技術や情報の収集と、長い伝統を受け継ぐ先輩水族館の経験を学び、来館者の皆様に自然を大切にし、生物をいとおしむ場として、特に青少年に夢を与え、豊かな心を醸成していただく一助になれるよう、職員一同、更に一層努力を傾注して参りたいと存じております。

## イルカの赤ちゃんが生まれた！

1993年7月21日、いつものように出勤して、トレーニングプールをのぞき込むとバンドウイルカのテラ（1983年3月25日搬入、体長302cm、体重330kg）に付き添われて、不安げにプールいっぱい泳いでいる仔イルカを発見しました。

新生児は、胎児のとき体内で2つに折れ曲がっているため、体に4～5本の横じわがあり、背ビレも折れ曲がっていて、尾ビレは丸まったような形で完全に水平に開いていません。そのため泳ぎも不安定で、方向も定まらないため、母親が仔イルカにぴったりとよりそい、泳ぎを助け、方向を修正しながら泳いでいます。しかも母親は、必ず仔イルカをプールの壁などにぶつからないように自分の内側にくるように誘導し、気を配りながら泳いでいます。

出産当時、トレーニングプールには、母仔以外に雌2頭のバンドウイルカが飼育されていましたが、そのうちの1頭（マリン）が母仔の側に付き、仔イルカを真中にはさむように泳ぐようになりました。

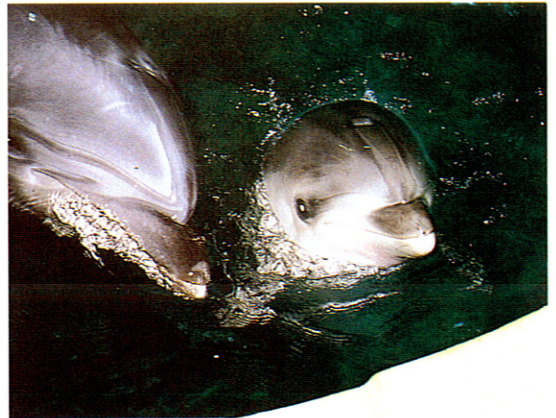
数日後、母親は、仔イルカから離れ1頭で行動するようになったため、仔イルカは乳母役と一緒に泳ぐことが多くなり、特に給餌の際は、母親はすぐに接近してくるのですが、乳母役は、仔イルカを係員から遠ざけて、守るように泳ぎ回り、かなり神経質になっているようでなかなか摂餌して



母仔4頭で泳ぎ回る

くれません。まるで本当の母親のようでどちらが親なのかわからないくらいです。

乳母役マリンは、テラと同じく1983年3月25日に搬入され、今までに3回の出産歴があり、中でも記憶に新しい1989年7月に出産した仔イルカ（アーサー）では、406日の育児経験のあるベテランのバンドウイルカです。



乳母役と一緒に泳ぐ

親が仔イルカから離れていることが多いため、日中授乳をしている様子を確認することができず、とても心配な日が続きました。授乳は母親がゆっくりと泳ぎながら体を少し横に傾け、仔イルカも母親の後方に潜り、体を傾けながら行ないます。乳首は生殖孔の両側に1対あり、ふだんは皮ふの中に隠れ、出っぱったオッパイはないので、外見からはほとんど目立ちません。しかし授乳のときには、仔イルカが吸うことによって乳首が出てきます。そのため給餌後など注意して観察しているのですが、係員が近づくとすぐに離れてしまいなかなか確認できません。しかし日をかさねても、仔イルカの体が細くなっていないこと、背ビレが立ってきていること、なにより呼吸に力強さがあり、しっかり泳ぎ回ることなどから確実に授乳はおこなわれていたようです。

テラの仔もようやく落ち着いて約1カ月が過ぎようとした8月25日、今度は、同居中のローラ（1986年11月13日搬入、体長280cm、体重245kg）が、日中係員に見守られながらの出産でした。ローラの仔は、テラの仔に比べてやや小振りでしたが、しっかりした泳ぎと、呼吸に力強さがあり、とても



元気な赤ちゃんでした。

テラ、ローラともに以前、出産の経験はありませんでしたが、無事出産するのは今回が初めてでした。

出産当時、朝の給餌では、いつもと変わらない様子でしたが、突然プールが騒がしくなり、ローラの生殖孔より尾ビレが少し出ているのを確認しました。それから出産するまで約40分間、悪戦苦闘しているイルカをみて、係員の手にも力が入り、思わず「頑張れ、もう少しだ」と大声を出してしまうほど夢中になっていました。そして無事に母親のお腹から生まれたばかりの赤ちゃんが初めて呼吸した時には、周りにいた係員から拍手が起り、小さな体で必死に泳いでいる赤ちゃんをみて、嬉しくてたまりませんでした。

通常、動物の赤ちゃんは、頭から先に生まれてくるのが正常な状態とされています。頭から生まれた方が足や首がつかえたりすることが少なく、へその緒が首にからまって窒息したりすることが少ないからです。しかしイルカは、ほとんどの仔が尾ビレから生まれます。いわゆる逆子の状態で生まれるのです。水中での出産では、頭から先に出ると完全に生まれる前に呼吸を始めておぼれる危険があるからです。

母親ローラは、テラより上手に赤ちゃんをプールの壁にぶつからないように誘導して泳ぎ、さすが母親と感じさせられます。初めのうちローラ母仔には、乳母役はつくこともなく、給餌の時も赤ちゃんを一時も離すことなく母仔だけで過しました。また授乳も日中4～5回は確認することができ、母親への給餌が終わると、仔イルカは母親の下に潜り込んで一生懸命オッパイを飲んでいるようで、母仔ともに順調です。

今では、テラの仔は、警戒心が強いおとなしい仔、ローラの仔は、好奇心旺盛ないたずらっ仔と、しだいに性格の違いを見せながらも元気に成長し、親たちからも離れ、2頭そろってプールいっぱいをかけ回り、係員と一緒に遊んでほしそうな様子で、プールサイドを通ると追いかけてきたりと、いろいろなものに興味を持ち始め、母親も落ち着いた様子で、わんぱくぶりを発揮する子供たちを見守っているようです。

昨年12月9日、初めての定期検査を行なうことが出来ました。母親の激しい妨害を予想していましたが、割合スムーズに仔イルカを取り上げることができました。

検査、測定を行なったところ、いつも母親と一緒に泳いでいるせいか、小さくみえる仔イルカの体も、1頭づつ取り上げてみると、ずいぶんと大きくみえるのには驚きました。また、ローラの仔は、性格からして男の子のようでしたが、共に女の子でした。その時の記録です。

	テラの仔	ローラの仔
出産年月日	1993. 7 .21	1993. 8 .25
誕生から	142日目	107日目
測定年月日	1993.12. 9	1993.12. 9
体長	184cm	159cm
体重	70kg	46kg
胴回り	107cm	92cm
尾ヒレの幅	38cm	34cm



初めての測定(テラの仔)

無邪気に泳ぎ回っている仔イルカも、離乳が生後6～8ヵ月ぐらいからはじまるといわれているように、母親に給餌をしていると、そばに寄ってきて、餌に興味を示しはじめてきており、いつごろから餌を食べてくれるのか楽しみです。

また春には、新しく「いるか館」もオープンする予定で、そのころには、母仔4頭そろって元気に泳ぎ回る姿を、皆様にお見せできるよう、健康に気を付けながら、係員一同見守っていきたくと思っています。(野澤)

## いるか館新築工事着工

浅虫水族館開館10周年記念の目玉事業として、かねてから懸案であったイルカの休養、放養施設として「いるか館」の着工が決定され、去る平成5年9月の吉日を選び、公営企業局長、水族館長ほか関係者の出席のもと「いるか館新築工事安全祈願祭」がとり行われました。

この「いるか館」は、直径12mのプールを備えたドーム型の建物で、ショーを引退したイルカの休養、放養としての役割のほか、イルカとのふれあいをテーマとして、お客様に、イルカの遊泳を観覧していただいたり、餌付けを体験していただいたり、イル

カにタッチしていただいたりと言った目的で建設されるものです。

オープン後は平成6年春を予定しており、水族館に新しい魅力を加えるものとして期待されています。

イルカショーと共に、イルカの生態を観察できる施設として、ますますイルカに対する理解を深めていただけたらと思っています。（小笠原）



## 水族館ねぶた運行

青森ねぶたまつりは、今年も8月2日から7日まで開催され、このうち2日・4日・6日の3日間、県庁



ねぶたが運行されました。今年は県庁ねぶた(明智光秀「小栗栖の場」)

の前ねぶたとして、水族館ねぶた2台を運行しました。

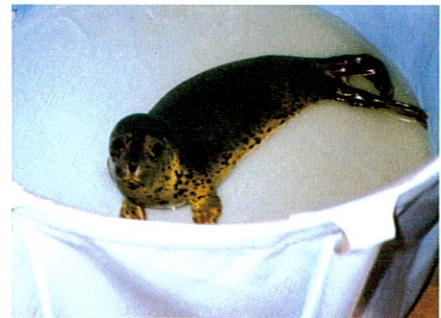
浅虫水族館10周年記念の一環として、一台はイルカを題材にしたねぶた、もう一台は魚を題材にしたねぶたです。引き手は県企業局と水族館の職員で、女子はハッピーに股引き姿、男子はハッピーに短パンの格好でと、普段はお目にかかれないスタイルで、水族館ののぼり、横断幕、堤灯等を持って大いにハッスルしました。また、たくさんの沿道の観光客の前で大型ねぶた並みに引き回しをして、ミエを切って、浅虫水族館のPRに大いに活躍しました。その後、2台のねぶたは、浅虫温泉へ寄贈されました。（小笠原）

## ゴマフアザラシの保護

昨年5月18日に、八戸市水産科学館前の海岸で、アザラシの幼獣を同館の職員が保護したとの連絡がありました。当館の担当職員が現地に赴いて確認したところ、体に黒い斑点が多数見られ、生後1ヶ月ほどのゴマフアザラシでした。性別は雄で、体長は約80cmありましたが、体重が8kgとやせが目立っていました。しかし、特に外傷や疾病はみられず、水産科学館の職員が餌のイカナゴを与えると、用意した餌をペロリとたいらげる程の食欲が有り、とても元気でした。この後、しばらくの間、水産科学館の仮設水槽で飼育されていました

が、6月18日に当館へ搬入することになりました。

搬入当日は、水産科学館の職員に抱きかかえられるようにやってきましたが、いやがる様子も見せず、まるで人間の子供のようでした。今では、他のアザラシやペンギン達といっしょに仲良く泳ぎ回っています（小山内）





## 「水の中のオアシス展」開催

地球上の総ての生物活動は、植物の働きの上に成立していますが、水族館での展示を考えると、主役は魚やイルカといった動物達であり、植物はそれらを引き立てるための脇役に過ぎませんでした。

そこで、4月29日～6月20日まで、水生植物達を主役とした特別展を開催しました。水量540ℓ～91ℓまでの小型水槽11個を用いて、アジア、アメリカ、アフリカ各大陸の熱帯河川や湖沼をイメージした水槽、花壇や箱庭をイメージした水槽、組織培養によって作出された最新の品種等の展示を行いました。期間中には、水草の葉から立ち昇る

気泡に気づいた親が子供に説明する姿を度々目にする事ができ、外見には動きの

無い植物達ですが、その体内（組織内）で繰り広げられているダイナミックな生理活動の一端をアピールできたのではないかと考えています。

(原田)



## 「アフリカ大陸の魚たち展」開催

未知の大陸、アフリカ。そこには他の大陸では見られない、独自の進化をとげた奇妙な魚たちがたくさんいます。そこで、夏休みの特別展として7月28日から9月28日まで「アフリカ大陸の魚たち展」を開催しました。

空気呼吸を行なうことが出来る肺魚やポリプテルス。他の大陸には近縁種が全く見られず、アフリカ大陸の中でのみ独特の分化が行なわれたモルミルスの仲間たち。大陸移動説の生き証人、ヘテロティス。そして奇妙な形や習性のバタフライ・フィッシュやデンキナマズ。これらの魚たちは、

色彩的には地味かもしれませんが、いずれも個性派ぞろいで、きっとお客様に強い印象を与えてくれたことと思います。

最後にご多忙にもかかわらず協力して頂いた、鳥羽水族館、松島水族館、屋島山上水族館および各園館の皆様へ深く感謝いたします。

(神)



## 「ふれあい水族館」開催

動物愛護週間に因み、9月23日から26日までの4日間に渡りふれあい水族館を開催しました。魚の給餌体験、イルカとの記念撮影などが主な内容で、1日2回、それぞれ20人位のお客様に参加していただきました。

給餌体験は海洋水槽の上から魚に給餌してもらい、激しく餌に群がる様子が観察でき、お客様から喚声があがるほど喜んでいただきました。

イルカとの記念撮影は、ショーステージでお客様とイルカ君が記念写真に納まるもので、ショーステージに上がったイルカ君に、おっかなびっくり

触れる小さいお子様や可愛いと言いつつ愛情込めて触れる若いカップルなど、

それぞれの感慨をもってポラロイド写真に納まっていたいました。参加された皆様には、大変喜んでいただいたと同時に、動物愛護啓発の一助になったのではないかと思います。

(渡辺)



## ～浅虫の海の生物たち～

### (15) キタムラサキウニ

*Strongylocentrotus nudus* (Agassiz)

キタムラサキウニは、棘皮動物(きょくひどうぶつ)のウニの仲間で、オオバフンウニ科に属し関東から北海道東部にかけての太平洋側、北海道から対馬、朝鮮半島までの日本海側および津軽海峡に広く分布しています。紫褐色の体に管足(かんそく)と、たくさんのトゲをもち、カラの直径10cm、高さ5cm位にまで成長します。沿岸の岩場や石がころがっている海底が主な生息場所で、先が吸盤になっているこの管足を動かしてエサとなるコンブなどの海藻の間を移動したり、岩の割れめに張りついたりします。

青森県沿岸にはエゾバフンウニ、ツガルウニなど6種類位が生息していますが、このキタムラサキウニは県内におけるウニ漁の漁獲量の90%以上を占めるほど産業的に重要です。ふつう珍味として

食べている部分はウニの生殖巣(せいしよくそう)でメスの卵巣、オスの精巣の



両方とも食べられます。産卵期が9月から10月のためその前の6月から8月にかけてが最も生殖巣が発達するので、この時期がいわゆる「旬」です。

当館では現在、タッチコーナーに入れて、お客様が自分の手にとって観察できるようにしています。このウニのトゲには毒もなく、普通にさわった位では刺さることはありませんので、恐れずに触って欲しいものです。また、エサをやったあとでしたら、体の下にある口でエサを食べている姿をガラス越しに見られることもあります。

(永田)

### 浅虫水族館日誌抄録

1. 20 油壺マリンパークよりタカアシガニ、コシオリエビ搬入
2. 20 共同通信「アンコウ」取材  
24 碧南海浜水族館よりサカサクラゲ搬入
3. 17 RAB「セミホウボウ」収録  
17 松島水族館へコツメカワウソ2頭貸出  
19 佐井村アワビセンターよりババガレイ(黄金)搬入  
25 毎日新聞、ATV、RAB、ABA、読売新聞、「セミホウボウ」取材  
26 RABニュースレーター「イルカとふれあい」取材  
27 テーリー東北「イルカと記念写真」取材
4. 13 東奥日報記者、マリンガール体験  
13 フンボルトペンギン産卵  
24 大阪海遊館よりポルカドット搬入  
28 JAS三沢一大阪直行便就航記念で、大阪海遊館よりヤリタナゴ他、当館よりヒラメと生物交換  
28 春の特別展「水の中のオアシス展」開催
6. 8 三輪氏よりベニオキナエビスガイ他、貝標本受贈
6. 18 八戸市水産科学館よりゴマフアザラシ搬入  
21 下関水族館よりカブトガニ搬入
7. 20 新イルカ、新アシカショースタート  
21 バンドウイルカ(テラの仔)誕生  
22 RAB「県政の窓」収録  
22 夏の特別展「アフリカ大陸の魚たち」開催  
23 RAB金曜ワイドあおもり生中継  
26 室蘭水族館よりオオカミウオ、ウサギアイナメ搬入
8. 5 RAB「お話サロン」収録  
6 入館者350万人達成  
19 北海道恵山町の秋田徹郎氏よりニュードウィカ標本(3m13cm)受贈  
22 東奥日報(イルカショー)取材  
25 バンドウイルカ(ローラの仔)誕生
9. 10 いるか館起工式  
24 東奥日報、毎日新聞、朝日新聞「仔イルカ」取材  
25 ABA、RAB、NHK「仔イルカ」取材
10. 15 第8回、図画展開催  
30 水族館まつり開催、RABラジオ「あおもりトゥデー」生中継
11. 29 フンボルトペンギン産卵



動物紳士録



コツメカワウソ

*Aonyx cinerea*

コツメカワウソは、東南アジアやインドなどの淡水域に生息しており、カワウソの仲間でも小型の種類で、頭胴長40~50cm、尾長20~30cm、体重3~5kg程です。手足に水かきがあり、指先には退化した小さな爪があり、これが名前の由来になっているようです。当館では雄2頭、雌3頭を飼育しており、1日に300~500g程のアジを摂餌状態を見ながら3回に分けて与えています。

コモリガエル

*Pipa pipa*

南アメリカ大陸の川や池に生息し、変態しても一生水中で生活します。体形は平たく、体色は地味な灰色をしています。呼吸のため時々水面から頭を出す以外は、水底にジッとしています。前肢に水生昆虫や魚などが触れると、大きな口でかき込むようにして食べます。また産卵後の雌は背中に卵を埋め込んで、子供が卵からかえるまで守る習性があります。

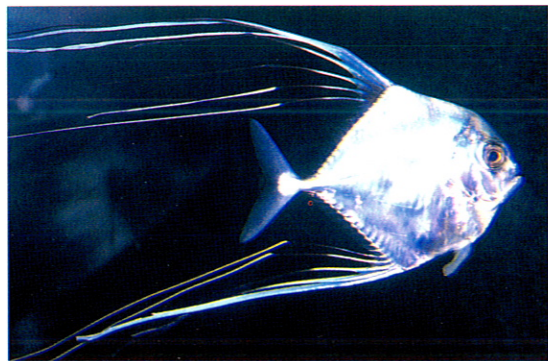


イトヒキアジ

*Alectis ciliaris* (Bloch)

インド洋、太平洋の熱帯から温帯にかけての沿岸域に生息しているアジの仲間です。

この魚の特徴は、背ビレと尾ビレのうち、前の方の数本が糸を引くように伸びていることです。この長く伸びたビレは、子供の時が一番長く、その後、成長するにしたがい、だんだんと短くなってしまいます。主に小魚や甲殻類などを餌として、体長約80cmほどに成長します。



表紙説明 バンドウイルカの仔

昨年7月21日に誕生したバンドウイルカ(テラ)の赤ちゃん。乳母役(マリン)と一緒に元気にフールいっばいを泳ぎ回る。

詳しくは本文2~3ページを参照して下さい。

マリンスノー No.15

1994年3月発行

編集発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25

TEL 0177-52-3377